

行田の久保さん 県内初 遺品整理士に

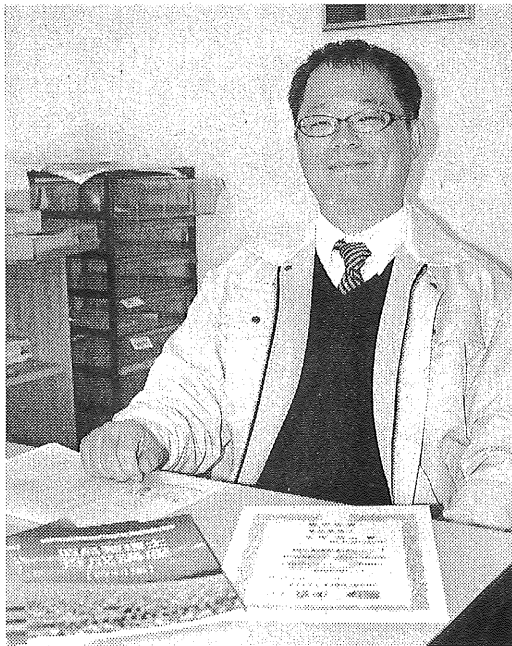
家族に伝える 故人の思い

亡くなった人の持ち物を見極め、仕分ける専門業、遺品整理士の県内第一号に、行田市埼玉のリサイクル業、久保公人さん(41)が認定された。高齢化や核家族化が進み、高齢者の孤独死が深刻化する今、遺品整理の需要はますます高まっている。久保さんは「遺品からは隠すことのできない、故人のありのままの思いが伝わってくる。故人や遺族に寄り添いながら、思いを少しでも伝えられたら」と気持ちを新たにしている。(江田崇)

▽涙の立ち会い

3〜4年前、行田市で廃棄物処理の会社を立ち上げ、当初から遺品整理業務に数多く携わってきた。需要の高まりに伴い、法規制に精通した正しい知識で業務をこなす専門

家を養成するため、遺品整理士認定協会(須田威会長、北海道千歳市)が昨年9月に設立されると、開講当初から通信教育で学び、2月3日に県内初の認定を手にした。「遺品整理と称して引き受けた品をそのまま不法投棄したり、勝手に処理した後、見積以上の高額請求をする悪徳業者の話も聞く。認定を受け、これまで以上に責任を感じた」と久保さん。遺品整理の仕事は全業務の半分以上を占める。需要の増加を年々肌で感じているからこそ、まなごしは真剣だ。



県内第一号となる遺品整理士の認定を受け、遺品整理の仕事にますます使命感を燃やす久保公人さん(行田市埼玉のリサイクル会社「イースム」)

遺品整理の現場は東京都内や県南部の都市部がほとんどで、大半の依頼は親と別居する子どもから。故人の一生分の写真、昔よく遊んだ木刀などの、昔話に花が咲き、立ち会いの最中に泣き出す家族も多い。「残す物、捨てる物を一品ずつ確認しながらの作業。一緒に住んでおけばよかったと涙が止まらない人もいます」。身寄りのない故人の遺品は、アパートの大家さんが

需要増え 寂しさも

依頼主になるケースが多い。「残す物」のない、全てが廃棄物となる現場は淡々と作業が進むという。

▽遺族とも向き合う

厳しい現場も待っている。トラックで駆け付けると一軒丸々「ごみ屋敷」。昔の人は特に物を捨てない。顕著なのはビニールなどの袋。棚の隙間にたくさん詰め込む。再利用するために洗って干してあることも多いと久保さん。異臭が漂う現場も多く、依頼主から「近所に気付かれないように、そつと片付けてほしい」と依頼されることも珍しくない。近所の人に作業について聞かれても「遺品整理」と答えることは一切ない。

「こんなエピソードも。資産家の遺品整理のとき、遺言状が出てきた。障害を持った子どもが一人いたという。「遺産を多めに配分した兄弟に、その分、その子をくれくれも頼むと念押ししていました。親は「これまで考えているのか」と久保さん。故人の思いが直接的に表れる遺品は時に、口で伝える以上の説得力を秘めている。

「遺品整理は本来は残った家族にしてみたい。仕事の増加に寂しさも感じる」と本音も。それでも多くの遺品を扱う日々は続く。「身内の死に接した家族からは、片付けたけれど、片付けたくないという複雑な思いが伝わってくる。誰かが後押ししてあげないと」。故人の「最後のメッセージ」だけでなく、残された家族とも向き合い続ける久保さんの表情は、優しくそしてたくましかった。

遺品整理士 核家族化が進み、遺品整理を業者に委託する遺族の増加を受け、遺品整理士認定協会(☎01223・42・0528)が創設した資格。遺品整理業は現在、資格や免許がなくとも営めるが、不法投棄などを防ぎ、法規制に沿った業界の健全化を目指す。同協会は2011年9月、孤立死や家族問題に取り組む団体を中心に設立。現在、埼玉県の3人を含め、全国で約70人が認定されている。同協会は「量にもよるが、遺品整理料金の相場は10万、20万円ほど。50万円を超えたら注意を」と呼び掛けている。

警戒区

福島

東京電力福島20キロ圏の福島県定され立ち入り禁止の警戒区域の一部に指定されている。政府が立ち入りが可能、立ち入り可難指解除準備する方針を村に、とが3日、分かつ村の警戒区域

動物が祝福

出